

幻の天神の探求

—宇和島地方の原始太陽信仰の考察—

松浦 哲仁

摘要

まず、俗に風水という方位の呪い^{まじな}を、宇和島の地図上で客観的にたどる。どのような集団がどのような目的で神社や寺や城などの配置を行ったのかを考察した。更に現代ならではの衛星写真による地図から発見した事実を説明する。この配置に意味があるのか、それとも偶然なのか、私も正直なところ断定できかねている。

また、地元の地名の語源について、私の趣味の韓国語の勉強から独自の解釈が浮かび上がった。昔はやった万葉和歌を古代韓国語で解釈する発想と一緒にあり、仮説としてある面では整合性がある。

そして、方位の基準となる太陽や星座への古代の信仰について考察し、私なりに検証してきたことを写真を交えて説明する。そこには古代の宇和島人の信仰の形が垣間見ることができる。特に、毛山について宇和島人は特別な思い入れを脈々と受け継いでいることが浮かび上がってきた。もちろん文字による資料が残っていない頃のことなので推測に偏っているが、人類の進歩の過程で自然を味方に付けることは必要不可欠だったにちがいない。

太陽信仰は宇和島のみならず、古代の天皇の祭祀やキリスト教の教典などにも見受けられる。独断かも知れないが、読んでいただいて、妥当か、あるいは単なる偶然か、賢明なる読み手の方々に判断を委ねることとする。

Key words

宇和島 郷土史 史跡 子午線 太陽信仰 古代の祭祀 祭神の上書き
地名の所縁 レイライン 文明の伝来

1 序論

長年、宇和島に住んでいるが、ふとしたきっかけでごく当たり前と思っていたことに実は隠された意味があるのではないかと考え始めたことがある。例えば、和霊神社と宇和島城天守閣は正確に南北に位置し、宇和島の天神町にはあるべき天神を祭る神社がないといったことである。

日頃から無頓着に暮らしていただけでは思いも掛けなかったことだが、このような事例を調べて考察した結果、私の宇和島の歴史の見方を大きく変えてしまった。今回は、この私の見つけた事柄を述べて、単なる偶然なのか、それとも本当に歴史に忘れられたメッセージが存在するのかを検証していく趣向である。もしかしたら大発見につながるかもしれない知的冒険に御同行願いたい。

2 宇和島の南北ラインと東西ライン

平成23年の秋分の日^{あきび}にグーグルマップサイト上で宇和島の地図を見ていて、ふと気付いたことがあった。それは、我が家の氏神の伊吹八幡神社と一宮様すなわち宇和津彦神社が正確に南北に位置することである。これは偶然だろうかと思いつつその南北の線を伸ばしてみると、北方向の直線上に奥高串の天満神社があることを発見した。2つの神社なら、たまたまとも考えられるが、3つの神社がほぼ一直線上に並ぶのなら、これは意図的な配置に

違いない。いったい、いつの時代に誰がこの配置を取ったのだろうか。正確な地図が普及した時代なら不思議はないが、別々の神社の名称が与えられるまでに成立した一連の聖地だとしたら、1300年以上前の古代の高等技術を駆使した事業なのではないか考えたのである。

この点を掘り下げるために、私はソーシャルネッ

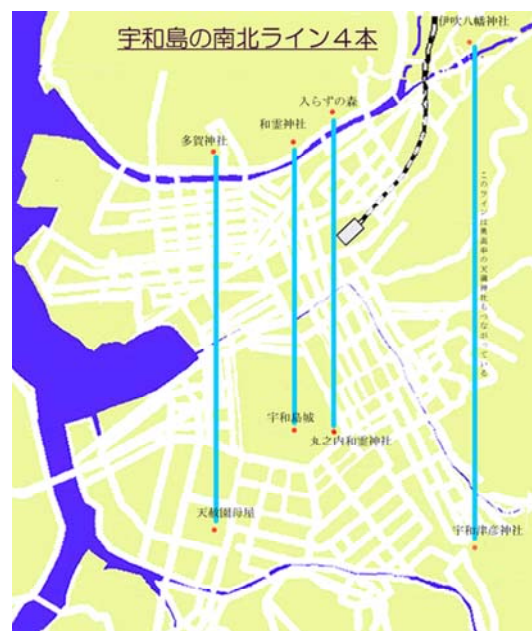


図1 宇和島地方の南北ライン

トワークのフェイスブックに調べたことを掲載しつつ、研究を続けていった。この論文はその記事を集大成したものである。

歴史の手掛かりについては次の章に展開するとして、まずこのような方位を意識した神社や寺などの配置を宇和島で探してみよう。偶然かも知れないし、なんらかの作為が込められているかも知れない。

最初に南北方向の直線を探してみた。この南北ラインを示したのが図1である。西側の2本は宇和島城下町の設計の上で形成されたもので、天赦園と多賀神社が呼応しているというのは意外であった。

多賀神社の本社は滋賀県にあり、イザナギ尊とイザナミ尊をお祭りする。宇和島伊達藩初代藩主秀宗の正室が彦根藩井伊家から輿入れしてきた縁で伊達藩創立期にこの地に分社されたのであろう。

宇和島城天守閣と和霊神社が南北ラインを形成しているのは普段は盲点だが、納得できることであり、伊達藩が和霊神社を故意に作ったことを示している。

また、東側の2本の南北ラインは私が結びつけたものであり偶然の可能性もある。しかし、丸之内和霊神社と入らずの森は井戸があるという共通点があった。そして、宇和津彦神社が12世紀末に城山南側に移転していたとの記録があり、この宇和津彦神社の祭祀に南北ラインが必要だったのかもしれないと考えられる。

そして、宇和津彦神社と伊吹八幡神社と奥高串の天満神社との3社の南北ラインは、東西に数十メートルの誤差はあるが、意図的に南北に並べられて祀られたと考えられる。この南北ラインが最も古いのではないだろうか。いつ頃に誰が何のためにこの配置にしたのであろうか。

また、後でもう1本見つけた南北ラインが、大浦の天満神社と三島神社と津島町増穂の三島神社との

3社のラインである。

誰が作ったかは、次の宇和島の古代史の章で考察するとして、何のための南北ラインかという点には、太陽か北極星の天体観測のためだったのではないかと私は考えている。

例えば、宇和島城と和霊神社の南北ラインを利用して、和霊神社で天守閣の真上に太陽が来たときを見張って正午であると告げることができる。古代でも正午を計るのと、夏至の日の影の長さを測ることを神聖な儀式として行っていたのだろう。

中国の古典「周礼」には、夏至の日の正午に各地で八尺(約242cm)の棒の影の長さを測ったという記述がある。洛陽付近でその影は一尺五寸(約45cm)だという。宇和島はもっと南なので、私の計算では約一尺三寸七分(約41cm)になる。それは古代の科学的な天体観測であり、宗教的に太陽の盛りが最高になったことを教えてくれる祭祀だった。文字による暦が普及する前は、大切な神事で、各地にそのような太陽の盛衰を告げる聖地があったのであろう。

次に東西方向の直線を探してみると、下の図2の宇和島地方の東西ラインの地図が出来上がった。

宇和島城は、「えんま様」で宇和島市民に馴染み深い佛日山西江寺と東西ラインを成す。これも宇和島城下町の形成時に決められたものであろう。宇和津彦神社と天赦園の東西ラインも盲点ではあるが、意図的なものだろう。天赦園の裏鬼門封じとしての風水的な意味合いが重要だったようである。

そして、龍光院と辯天神社と九島の恵美須神社との東西ラインは、彼岸の日の入りを拝むのに適したラインである。そもそも辯天神社のある弁天町は元々海で、江戸時代に埋め立てられた土地である。つまり、意図的にここに神社を置いたのであり、近世でも方位に対する信仰が重視されていることが読



図2 宇和島地方の東西ライン

み取れる。九島まで東西ラインが設定されているということは、その測量のために坂下津の戎山に何らかのランドマークを残した可能性も考えられる。今後、九島までの橋が架かる計画の戎山だが、工事中に何かが見つかるかもしれない。

そして、実はこの東西ラインはもっと西に伸びており、嘉島の南端の八大龍王神社もこのライン上にある。龍光院と八大龍王神社と呼応しているところが興味深い。また、各神社の本殿の向きも重要な意味が込められている。個々には挙げないが、例えば和霊神社が南南西を向いているのは、北北東方向にある大三島の大山積神社を拝むようになっているのである。

このような史跡の配置を分析した地図は、文末に掲げた「宇和島城下町にみる藤堂高虎の設計技法」の研究でも作成されており、宇和島が風水的に祝福された町であることがよく分かる。

だが、私がこだわるのは近世の宇和島藩の都市計画ではなく、宇和津彦と名付けられるような古代の土着の勢力の痕跡である。冒頭にも書いたように、JR宇和島駅付近の天神町という地名の割には、天満宮が存在しない。素直に考えれば龍光院に置き換わったのだろうと考えられるが、なぜ置き換える必要があったのかという疑問が出てくる。宇和島城の鬼門封じの寺を格式高く置きたかったのであろうと考えられるが、古い宇和島の宗教権威を封じ込めようとした意図もあったのかもしれない。「宇和島城下町にみる藤堂高虎の設計技法」の地図には天神の位置が明確に示されている。いったい何からの出典なのか興味深い。

その測量技法もどのような技法だったのか。そしてその方位の施設を使ってどのような儀式や天体観測を行ったのか、様々な面で考えるべきことが多い。

3 宇和島の古代史

宇和島城とその城下町を設計したのは藤堂高虎だが、それ以前に宇和島地方に南北ラインを定めた勢力がいたとすれば、いつ頃のどのような集団だろうか。この点の手掛かりをここに並べてみたい。

元々、宇和津彦神社は8世紀には現在の場所付近にあったという。

そして、6世紀に国乳分皇子（くにちわけみこ）を宇和別君にしたという記録（先代旧事本紀）がある。大和朝廷から皇子が来た公式の記録で、この宮を米所の宇和に置いたか、海運拠点の宇和島に置いたか分からないが、宇和島だったとしたらこの野川（古名毛山村）の可能性もある。仮に出先機関程度だったとしても、測量技術を伝えて宇和島地方の国造りを助けたのかもしれない。これが幻の天神様そ

のものの可能性がある。

宇和津彦神社は12世紀末に城山（古名丸串城）の南側に移転した。この時代は鎌倉幕府の創生期である。西園寺家が宇和の領主になる直前である。

宇和島城の前身の板島丸串城は、天文15年（1546年）から約30年間の間、高串の家藤監物が城主になっていた。この史実は戦国時代の勢力争いの成り行きの結果なのか、天神の祭祀を取り仕切るためなのか、その背景をあれこれ想像してしまう。

また現在の西予市の宇和津彦神社では、宇和にあった宇和津彦神社を藤堂高虎が宇和島城に移したと伝わっているそうである。この宇和の宇和津彦神社が元なの、分社なのかは分からないが、戦国末期に古い信仰の再編制を図った様子が見えてくる。

そして西暦1632年に現在の野川（古名玉串城）に移された。この時代は伊達藩初代秀宗の治世で、1620年に山家清兵衛が殺され、1651年に和霊神社が創建される間になる。

愛宕山は元来、九州側から毛山黒孫溪谷を経て高知の中村へ行く最短ルートの入口だったと思われる。

そこに南北の子午線を定めて、千年以上前にはランドマークと観測点を結んで祭事が行われてきたのではないかという仮説が出てくる。

また、伊達藩の城下町の構築過程で宇和津彦神社も移転したのだから、位置関係も計算済みのだろう。宇和津彦神社と愛宕神社との関わりもいわくありげである。更に山家宅跡とされる丸之内和霊神社が旧宇和津彦神社だとしたら、入らずの森との南北ラインも儀式にとって重要なランドマークとして13世紀頃に整備された可能性がある。

伊吹八幡神社も8世紀にはあったので、1300年以上前に愛宕山－丸穂－伊吹ラインの子午線が引かれていたことになる。これは前にも挙げたように、暦が普及する以前に夏至と冬至の観測や正午の観測を行い、嵐の時期や寒冷期に備える必要がある農耕や生活のサイクルを予報するような役割を担っていたのではないかと考える。

つまり、幻の天神を探求していくと、古代からの祭神の上書きが起こっているようなのである。これは和霊神社だけではなく天満宮についても見受けられ、政治のために土着の信仰を作為的に改変していった痕跡が見えてくる。

また、宇和島の子午線を設定したのが、日本人ではなく、中国大陸や朝鮮半島の渡来人の可能性も考えられる。中国大陸からなら、春秋戦国時代の動乱や徐福や遣隋使・遣唐使などで宇和島に流れ至った集団が考えられる。朝鮮半島からなら、高句麗や百濟の落人が渡来してきた可能性が考えられる。

そして、当然、宇和島人自身で独自の高等技術や

天文信仰を作り上げた可能性もあり得る。

このような歴史の経緯を並べてみて、宇和島地方に残る幻の天神の痕跡を探求していった訳だが、客観的にみれば、推測の多い主張であることは自覚している。それでも、このような観点で見ていくと多少なりとも理にかなっている部分もあるので、今後、この南北ライン上に何かの遺跡が発見されたりしないだろうかと期待しているのである。

4 宇和島の子午線の調査

伊吹八幡神社や宇和津彦神社は再々参詣したが、奥高串の天満神社は行ったことがなかったので、平成23年の11月に行ってみた。(写真1)



写真1 奥高串の天満神社

神域らしい広さで、鳥居も掲示板もなく簡素なたたずまいだった。

宇和島の子午線の手掛かりはないかと見回したが、素朴な神社で特に気がついたことはなかった。そこで南側の山に登ってみると新たな発見があった。

何を見つけたかを述べる前に、宇和島の子午線の精密さを示してみよう。宇和津彦神社と伊吹八幡神社と天満神社の位置はほぼ南北に一直線ながら、東西に数十メートルの誤差がある。昔の測量技術ならこれぐらいの誤差があるのが当然な気がする程度である。ところが真の宇和島の子午線は非常に正確である。その基準地点は次の2か所である。

① 愛宕公園記念碑台

北緯 33 度 12 分 東経 132 度 34 分

② 石鎚神社鳥居

北緯 33 度 14 分 東経 132 度 34 分

試しにグーグルマップ上でこの2点を探して結んでみていただきたい。それぞれ土がむき出しなので、衛星写真でも浮き出ており、はっきり分かる。

まず、愛宕公園(写真2)は宇和島市街を見晴らすのに最高の景勝地で、昔は愛宕神社があった。この公園内の記念碑の建つ高台がちょうど東経 132 度 34 分の地点である。

ここの地名の「あたご」とは、咳き込むことを「たごる」というように、つかえるという意味があるのではないだろうか。もう見掛けることがないが、



写真2 愛宕公園

下肥を貯める大がめのことを「肥えたご」といった。一時的に肥やしをとどめておくところという意味なのだろう。この愛宕山でも、登り道の中腹の踊り場のような広場をアタゴといったのではないかと考えている。

次に石鎚神社(写真3)は、伊吹八幡神社の西側の登山口から20分ほど徒歩で上っていくと到着する

石鎚神社は十数年前に漏電火災で焼失した。私は子どもの頃、拝殿の縁の下の地面でアリジゴク取りをしたことを覚えている。



写真3 石鎚神社

この石鎚神社境内の鳥居の地点が、正確に東経 132 度 34 分に当たる。古代の最高技術か、正確な地図が出来上がってからの作為か、とても興味深い謎である。

かつては、山頂の樹木は刈り込まれていて、見晴らしの良いこの場所に幻の天神様の重要な施設があったのかも知れない。

さてこの2か所は子供の頃から遠足などでなじみの場所だったが、奥高串には行く機会がなかったので、初めて訪ね、第3の奥高串のスポットを探索してみたのである。奥高串にも東経 132 度 34 分のランドマークが本当に存在するのか、内心は半信半疑で神社の南側の山を歩いて登って行ったのだった。するとほんの5分ほどで期待通りの祠跡らしい空き地を発見した。写真4のような場所で礎石も何もなかったが、昔の人たちが大事にお祀りしていた場所のようで、草を刈り込んで手入れしてあった。地元

の方に聞いていないが、一部を切り崩されている人工的な丘である。その座標が、

③ 奥高串の丘

北緯 33 度 16 分 東経 132 度 34 分
であり、先の 2 か所と正確に同じ経度だった。



写真 4 奥高串の山中の東経 132 度 34 分の丘

これを見つけたとたん、私は宇和島の子午線の存在を確信した。3 か所も緯度が揃った特別な場所が見つかるということは、偶然ではなく測量して位置を定めたに違いない。これこそ私にとって、千年紀的な大発見であったのである。

すべてが同時期かどうかは検証していないが、記録の残る 7 世紀よりも以前に定められたものだろう。この宇和島の子午線を確定して古代の宇和島人は何を観測したのだろうか。毎日の正午か、南中高度か、北極星か、はたして何なのか未だ謎である。

奥高串の地形は、外敵を迎え撃つには有利な閉じた地形である。古代において穀物等を保管したり、神官や族長を護ったりした場所なのかも知れない。

ただ、この位置を測量して決めるのに、毛山や泉が森から狙うことができるのだろうか。この位置では南側に山があって鬼ヶ城は見えない。また泉が森は南側に木が生えていなければ見通せる場所である。

奥高串の祠跡から更に 5 分ほど北東の尾根方向に上ると、写真 5 のように左側に泉が森のテレビ塔群、右端の稜線の左下にかすんで見える遠い稜線が鬼ヶ



写真 5 奥高串から望める鬼ヶ城連山と泉が森

城連山である。何とか測量や、泉が森や毛山側からの見当付けはできると思われる。

また、宇和島の子午線上の丸山付近は、旧の火葬場があったり、三度桜の名所や桜前線の基準桜などがあったりした。丸山公園の開発についても感じることだが、微妙に幻の天神様にあやかるような事象が残っていて、何やら宇和島の歴史が抱えている無意識の衝動性が垣間見える気がするのである。

八十八か所のことで父と話した。旧宇和島市内にお札所がないのは昔、海岸線がもっと山寄り寺を開くほど開けてなかったからではないかというのが父の意見だった。私もずっとそういうことだろうと考えてきたが、ここに述べたような考察を踏まえて、新興勢力だった密教が入り込む余地がないほどに土着の神道が隆盛だったのではないだろうかと考え始めている。

また、宇和島の子午線の北に 4 2 番札所の佛木寺も当たっているようにも見える。そして佛木寺の大本尊は大日如来なのである。これは偶然かも知れないし、忘れられたメッセージかも知れない。

また、佛木寺の近くの北緯 33 度 34 分の地点が以下のグーグルマップの座標である。

<http://maps.google.co.jp/maps?q=33.316884%2C132.576034&hl=ja&num=1&t=h&vpsrc=0&brecurrent=3%2C0x354f62cf8c91d095%3A0x2b0108e7ec9ae5a5%2C0&z=16>

ここには、あたかも私を誘うように刈り込んである山がある。ここまで子午線は測量されていたのだろうか。この位置より 600 メートルほど真南の辺りも、佛木寺の真西に当たり道祖神や祠の跡がありそうな予感がするが、実際はどうだろうか。

佛木寺の本尊は大日如来である。太陽信仰と子午線を暗示しているようで、だんだんとトラベルミステリー的な展開になってきた。

この幻の天神を探求しつつ、私にこのようなことを調べさせようとしているのは神なのか、それとも単なる個人的な好奇心なのか、自分のことながらふと不思議に思うことがあった。するとすっかり忘れていたが、ふと、高校生の頃に一人旅で隠岐島まで渡った旅のことを思い出した。その際に宇和島の真北に当たる日御碕神社も参詣してきたが、宇和島地方の入り組んで急峻な海岸線によく似た漁村だったように覚えている。この宇和島の子午線を巡る思索は、今から 20 年程前から私の深層心理に刷り込まれていた懸案なのかも知れない。

5 地名の考察

この章では、地名の考察によって、宇和島地方の渡来人の痕跡を探ってみる。

実は平成9年から韓国語を勉強してきて、日本語に移ってきたと思われる言葉が多々あり、驚かされた。例えば、腹ペコと言うが、「ペク」がお腹のことで、のっぽと言うが、「ノッポン」が高いという意味である。トロ箱と言うが、「トルダ」が放り込むという意味で、トロ箱は放り込む箱のことだ。「しんどいで」と言うが、ヒンドルダが大変だという意味で、この言葉がなまっていったような気がする。奈良は、国の意味の「ナラ」に通じる。この他にもいろいろな単語で面白い一致に気が付く。

その発想で宇和島地方の地名を読み解くと、知永峠は「지나가다 (チナガダ)」から来ているのではないかと思われる。チナガダとは、通り抜けるという意味の動詞で、偶然にしては余りに言葉が一致するので、私はこれが語源だと確信している。どれほどの昔なのかは分からないが、渡来人の影が垣間見える忘れられたメッセージなのではないだろうか。

韓国語の勉強をし始めた頃、韓国語で万葉和歌を解釈するという「人麻呂の暗号」という本が話題を呼んだものだった。真偽のほどは分からないが面白い本だった。

様々な言葉は必ず初めて使った人間がいる訳で、その言葉を作った人はまさか自分の発した言葉が、歳月を超えて残っていくとは想像していなかっただろうし、反対に思うままに話す後世の人たちもその単語の語源はほとんど知り得ずに使っている。

地名の語源も大抵は諸説あり、知れ渡った説が正しいとされるものである。ときには先入観を捨てて、様々な発想で語義を考えることも、忘れられたメッセージを目覚めさせる方法であると私は考える。

更に次の説は考えた私もこじつけであるような気がするのだが、多少は妥当性があるので紹介することにする。

毛山 ケソン 開城
 (高句麗の都 南北朝鮮
 共同運用の工業団地)
 権現山 クンガンサン 金剛山
 (南北朝鮮共同開発の観光地)
 黒尊 クロスン そんな

「けさん」は音訓混ざっていて苦しいものがある。ただ、もし日本の権現山のいくつかがクンガンサンだとしたらその近くには渡来人の遺構があるかもしれない。

素直に考えて権現山は何権現なのだろうか。この権現山を拝む神社が近くにあるとすれば、これを手掛かりとして、命名時期や信仰した集団の性格が分かってくる。今の段階ではまだそこまで研究が進んでいない。

そして、黒尊溪谷の黒尊の語源は、過去七仏の中の一仏の名前で山口県の狗留孫山や奈良県の俱留尊山など国内の数カ所に見られる地名である。(図3)昔からこの山々を修行の場にしてきた修験道の行者が名付けたのではないかと推測している。



図3 俱留孫仏にちなんだ地名の分布地図

過去七仏とは、仏教で釈迦の前にも悟りを開き衆生を導いた導師が6人いたと伝えられており、釈迦も含めてこの七仏の名は、毘婆尸仏、尸棄仏、毘舍浮仏、俱留孫仏、俱那含牟尼仏、迦葉仏、釈迦仏の七仏で、その4番目の仏が俱留孫仏である。つまり俱留孫仏は釈迦の3代前の師匠である。このような特別な仏がどうして日本の各地の地名に取られているのか、私はとても不思議に思っている。

また、もし知永が当て字なら、高串や光満も当て字として元の音を伝えているかもしれないと推測して、あれこれ考えてきた。その最初の解釈は、

ター	ガゴソ	→	完全に行った
ター	カグシ	→	全部がかぐわしい
ミッタ	マーニ	→	会うことが多い
ミツツ	マ	→	会うとき

などではないかと考えていた。そして、フェイスブックのやりとりで教わったのが、次の解釈の可能性である。

다 각시	タカクシ	→	みんな花嫁
믿음 만	ミドゥムマン	→	信仰(信頼)だけ

ミドゥツマン(信頼だけ)は、タカゴソ(皆行つた)と組み合わせると意味がつながりそうな気もする。三間の音も関係あるかもしれない。

泉が森のモリも、森林の意味ではなくて、韓国語で頭という意味の「モリ」で意味が通る。瓶ヶ森も同じ解釈ができる。日出るを見る頂きといった意味が込められている可能性がある。また吉田町の犬尾

山も何か音が隠れていないかと考えている。

知永峠が古代の韓国語の지나가다 (チナガダ) からきているのが真実だとしたら、この地名を決めたのは日本の古代に高句麗から直接渡来した集団か、一度、九州地方で集落を形成した集団の一部が、宇和島地方に移り住み、農耕技術や生活様式や信仰などの文化を伝えた結果ではないかと考えられる。

私の姓の松浦も、魏志倭人伝に出てくる末廬国の音を伝えているので、個人的に大陸からの文化の伝来には関心が高い。ただし我が家系は、松浦氏直系ではなく、明治から名字を許されたときに近所の人たちと松浦宗案にあやかっけて名乗るようになったと聞いている。

もう一つ地名について考察すると、四万十川についても独自の解釈ができる。四万十川は、定説ではアイヌ語のシマムタ (美しい川) から来ているそうである。しかし、十万渡の音を韓国語で読めば、

십만도 천 (シップマント) → しまんと

シマントの音になる。すわわち、故郷よりはるばる万里渡ってきたのだなという感慨が込められている地名と解釈できる。四万十川は渡川ともよぶので、十万渡の妥当性もより高そうである。

また、「いごっそう」も、異骨相と字を当てられるが、

이것이야 이고쑤쇼 → これだ
익었어 이고쑤 → 熟した

との音と一致して、こうといったら引かない出来上がった人物との語感が浮かび上がってくる。また「はちきん」という言葉も何か音があてはまらないかとずっと考えている。

この観点ももし真実だとすると、四万十川近辺に高句麗滅亡時 (西暦 668 年 白村江の戦いの 5 年後) に四国まで亡命してきた渡来人がいたのかも知れない。その際には毛山から黒尊川沿いの経路が取られたのではないかと推理できる。

もっと考えてみれば、四万十川の「十万渡」は音読みなので、中国語でもシーマントになる。万里は約 39 万キロメートル、中国の古い単位で約 5 万キロメートルで地球 1 周よりも長い距離であり、朝鮮半島からでは近すぎる。字義通りだと、インド、中東、ローマから来たとか、太平洋の反対側から来たという説が成り立つ。または十万人渡ってきたという解釈なら、一つの民族が亡命してきたという解釈になる。5 万キロだとしたら、地球の円周を測ろうとして誤差が出たとも考えられる。39 万キロだとしたら、月と地球の距離の記録もあてはまる。ここまでくると説明している私も信憑性を感じないが、

歴史に忘れられたメッセージをよみがえらせるためには、柔軟な見方で事象を捉える発想法も有効ではないだろうか。

更に現在の課題として、伊達藩が東北地方から持ち込んだと思われる須賀川や鬼ヶ城の地名の古い地名を調べたいと思っている。江戸時代より古い地図や古文書を漁らなければならない。

6 冬至の日の出の位置

宇和島の子午線について注目する前に、私は日の出の方角に注目して考察したり観測したりしてきた。例えば写真 6 が平成 22 年 12 月 22 日の冬至の日に撮影した鬼ヶ城の日の出である。中央の最も高い峰が鬼ヶ城で日の出のすぐ東側のこぶの部分が毛山である。



写真 6 冬至の日に毛山に上る朝日

この冬至に毛山から太陽が昇る場所は、城北中学校東側の歩道橋の上である。本当は入らずの森で観測したかったのだが、無断で入る訳にはいかないので、付近で一番見晴らしのよいこの陸橋に上がって冬の朝に 1 時間余り待って午前 8 時 20 分に撮った。

古代の太陽信仰の痕跡を確かめられないだろうか調べていたのだった。自分の仮説どおりに毛山付近から最初の太陽光線が走ったときには、筆舌にしがたい手応えを感じた。あの山頂にシンボルの御柱か神殿があったことだろうと想像した。そして毛山という素朴な地名が宇和島の住民たちにはごく自然に馴染んでいる深い訳を知ったような気がした。千数百年以上前に毛山をランドマークとして、入らずの森付近で冬至の日の出を観測する祭事が行われていた可能性がある。そして近隣の人々はそのお告げを元に太陽の気の回復を信じ、春の準備に取りかかったことだろう。

車でスーパー林道に登り、毛山を歩き回ったことがあるが、まったく何もない丘で、逆に年月を経た樹木は生えておらず、歩き回れるぐらいなので、長年手入れされてきた場所であることが分かった。ここも発掘調査をすると掘って立て柱の痕跡などがあるかも知れない。



図4 宇和島のレイライン探査地図

例えば高知県まで荷役をする場合に、一旦この山の上に中継倉庫を置き、中継倉庫までの上げ下ろしの人夫と黒尊川までの運送を担う馬喰たちとの連携で穀物や塩などの物流がなされていたのではないかと推測する。

この太陽信仰の痕跡らしきものからも、日の出と日の入りの位置を観測し、夏至と冬至を知り、太陰暦を補完していた祭事が、四国西南部全体の暦として当てにされていたのではないかと推測している。

毛山の中央より2百メートル程度西側に日が出た訳だが、観測地点をあと数百メートル東にすると、冬至の日に正確に毛山の中央の日の出が見られるのである。そしてその方向には縄文時代の住居跡が発掘されており、伊吹町遺跡と呼ばれている。伊吹町式土器といえは古代史で土器の分類用語として通用するほど有名である。発掘場所は北宇和島の大型スーパーのあたりである。高光川沿いで、縄文人が貝や木の実を食べながら生活し、毛山を見上げていたことだろう。そして、好奇心旺盛な者がどうやって太陽が山から登ってくるのか確かめに鬼ヶ城に登っていったに違いない。

数千年前に北宇和島付近に定住していた古代人が毛山をランドマークにして暮らしていたと考えたと考えると、幻の天神様の由来は大変由緒正しい気がしてくるのである。

更に想像すると、毛山の山頂から三崎半島ののろ

しか鏡の光信号を介して九州との正午の時差を図ることで、地球の大きさを測ることができる。幻の天神様はそれぐらい高度な天文観測をしていたのかもしれないなどと考えたりもするのである。

この探求のために作図した図4の宇和島のレイライン探査地図をご覧ください。この地図を参考に意味のあるラインを探してみると更に興味が湧くことだろう。

ここで広域にして、泉が森や毛山を入れた地図にしているのは、日の出の位置を推定するためである。泉が森と毛山が天然の南北ラインを形成している。高度な測量技術を導入しなくても、宇和島地方は子午線を授かっていると言ってもよい。

まず春と秋の彼岸の日の出と日の入りは、地図上で当然、東西に水平方向である。嘉島の八大龍王神社から龍光院までの彼岸ラインが浮かび上がってくる。

そして冬至の日に宇和島の日の出は最も南寄りになり、水平線より高く日が上がるのは7時過ぎで、真東よりも28度南側の方角になる。この元のデータは海上保安庁の日月出没時刻方位サービス御案内サイト

http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KOHO/automail/sun_form3.htm

で調べた。

ただし、宇和島は山に囲まれており、伊吹八幡や

和霊神社で日の出を迎えるとすれば、鬼ヶ城連山を越えて太陽が出てくるのはこれよりも約1時間後で角度も真東よりも43度程度南側になる。

同様に夏至の日の宇和島の日の出は最も北寄りになり、5時頃に真東よりも29度北側から日が昇る。これも山の高さを考えると、1時間程度後で真東よりも14度北側あたりに太陽が出てくるはずである。

更に泉が森をランドマークとして日の出を拝む場所はどこかを探してみた。地図のような方角の平行線を各地点から伸ばしてみれば、おおよその日の出地点が予想できる。推定場所を言うと奥高串の天満神社付近で冬至の日に泉が森の山頂に日が昇って来るだろう。また九島の東側、願成寺付近で、冬至の日に泉が森の山頂に日が昇って来るだろう。そして願成寺付近は冬至の日に鬼が城から日が昇るであろうと仮説を立てた。

つまり泉が森と鬼が城の両方のランドマークを拝める聖地が九島の願成寺ではないだろうか。または、九島の天満神社近辺で起こる現象かも知れない。第40番札所観自在寺の奥の院であるこの願成寺の役割が浮かび上がってくるのではないかな。

更に冬至の日の出ラインは、毛山ー龍光院ー和霊神社ー大浦の天満神社と結んでいるように見えるのではないかな。正確には毛山との距離で日の出の角度が変わってくるので正確に直線上に並ぶものではないが、鬼ヶ城連山をランドマークとして活用した可能性が考えられる。

以上のような地図上の予測を元に、平成23年末の冬至の時期に日の出地点を観測して回った。少々、悪天候だったがいろいろと検証できた。



写真7 道連橋で撮影した冬至に毛山に上る朝日

まず、平成23年12月21日8時19分（冬至の前日）に道連橋のすぐ川上で観測していると毛山から日が昇った。写真7の須賀川に掛かった道連橋の向かって左側に、道連大師堂がある。私が城北中学校に通学するのに毎朝通った所である。道連という僧が橋を架けるのに尽力したので、お堂を建てて

顕彰したのだろうとぐらいに考えていたのだが、この写真から考えると、大昔から冬至を観測する聖地としてこの場所は尊ばれてきたのではないだろうか。まったく日常の中に溶け込んでいて、最近まで考えたこともなかったのだが、キリスト教に潜んでいる太陽信仰のように、宇和島の天神の姿が垣間見える出来事である。

いったい何千年前から、宇和島人はこの毛山のランドマークを新春の印としてきたのだろうか。もし真実であれば、壮大な歴史ロマンではないか。



写真8 道連大師堂

写真8のお堂が道連大師堂である。昭和52年頃はもっと大きく、塾が開かれていて文字通り寺子屋だった。左の白い小さいお堂は、一石一字経王塔という石塔が入っていて、この石塔は天明4年（1784年）の大飢饉の餓死者を弔うためのものである。つまり230年ほど昔の宇和島人は、大災害の祈りのためにこの大師堂にすがったのであり、古来からの信仰の地であったことが分かる。道連とはいつ頃のどのような僧だったのかが今後の研究課題の一つになる。



写真9 冬至頃の奥高串山中の日の出

冬至の12月22日は雨だったので、続いて平成23年12月23日8時29分（冬至の1日後）に奥高串の山で観測していると。泉が森よりも南寄りに朝日が出た。（写真9）曇り空だったので一瞬間に日輪が雲に透けて見えた間に撮影した。私の仮説に反して、東に1 kmほど寄らなければ泉が森の山頂からの日の出にはならなかった。あるいは1か月ぐらい前後すれば、日の出の位置がもっと東の方に移動していることになる。

平成23年12月26日8時9分（冬至の4日後）に宇和島港（住吉山の西側の岸壁）で観測していると、八面山山頂のすぐ西側から朝日が出た。（写真10）寒波がやってきて山はうっすらと雪が残っている様子だったが、晴れていてしっかりと撮影できた。朝日の出たくぼんだ地点の東側の最も高い山頂が鬼ヶ城でそのすぐ東のこぶの部分が毛山である。



写真10 冬至頃の宇和島港岸壁での日の出

神々しい眺めだったので、思わず合掌してしまった。この撮影方向の真後ろが宇和島湾で、その延長した先には赤松遊園地がある。もし九島の東の端の海岸から観測したら、この写真の右側の山頂の権現山から朝日が昇るはずである。これも私の予想とはずれていた。権現山もランドマークになっているのかもしれない。（図5）

7 古代の太陽信仰の名残

太陽信仰の名残を探求し続けているが、例えば針で時間を表示する丸いアナログ時計にもその名残がある。アナログ時計がどうして右回りなのか。それは、日時計の影が右回りに回るからである。時刻というものが北半球で考えられた証拠になる。また、1年が12か月なのも月の満ち欠けを12回数えればほぼ1年なのでそれが定着し、時刻も12時制になった。

これまで宇和島の子午線を巡る考察を述べてきた。つまり、天神町という地名で暗示されていた古代の広範囲の天体観測の遺構を探求してきたのである。

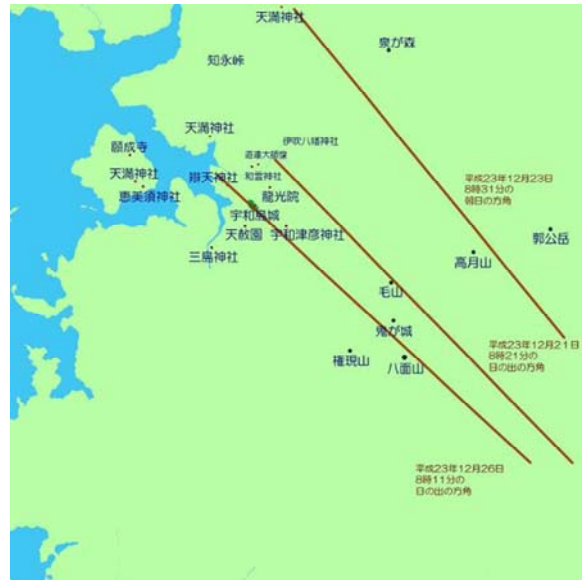


図5 冬至の日の出の方角観測の地図

この章では、幻の天神の探求の観点を日本のみならず世界の手掛かりに当てはめて、古代の太陽信仰の名残を浮き彫りにする。

古代人は太陽系のしくみが分かっていなかったの、日食や月食は、影の天体、羅睺星（らごうせい）が太陽や月を覆うことで発生すると考えた。

例えば天の岩戸伝説も西暦247年3月と西暦248年9月の皆既日食を伝えているのではないかという説（斎藤国治氏）がある。

また、古代の太陽崇拝の儀式の原型が、続日本記に記録されているそうである。桓武天皇が西暦785年に大阪府枚方市付近で冬至の日の出に牛を捧げて、春の招来を祈念した。（写真11）このあたりには百濟神社があり、百濟滅亡の際に王侯貴族が亡命してきたと言い伝えられている。



写真11 桓武天皇が冬至の祭祠をおこなった杉本神社

この史実から太陽に牛を生け贄として捧げるといふ遊牧民族的な儀式が行われていたことが分かる。したがって、もしかしたら牛鬼もこの祭祀の何かのシンボルかも知れない。牛は丑としたら北北東または午前2時または12月を意味する。長い首や尻尾の剣が目印の柱や指針を象徴する。何らかの観測儀式の名残か、祭事の生け贄か、まだ分からないが宇

和島地方でも古代に独特の儀式が存在したと思われる。

宇和島に伝わる竹ボラも正午を告げる合図や測量地点を確認する合図の音として古代より伝わる通信器具だったのかもしれない。

また、夏祭りの輪扱は、夏越しの祓いの茅の輪くぐりとして全国で行われる祭だが、京都の上賀茂神社では輪を8の字に回り込んで3回くぐるのが作法である。これが正式だとすると、一年の日の出の位置の周期的な移動を象徴しているのではないだろうか。それを夏至が終わった後の儀式に取り入れたのではないかと私は推測している。

また、この8の字回りの風習は、イザナギとイザナミの国産みのまじないで柱を回ったときにも当てはまることかもしれないと考えている。すなわち2本の神は太い1本の柱を回ったのではなくて、南北に並んだ2本の柱を8の字に回ったことを伝えているのかもしれない。

また、太陽は冬に再生すると考えた人が冬に再生する神、エジプト神話のホルスやギリシャ神話のアドニス（春に芽を出す植物のシンボル）やキリストの再生伝説を残したのであろう。宇和津彦神社の祭神の味鋤高彦根神も、罰^{ばち}によって死んだ天若日子が復活した姿と見る見方もあり、同様の春の再生の暗示がある。

キリストは東方の三賢人に誕生を祝福され、やがて12人の弟子を持つ。東方の三賢人を冬の星座オリオンの三つ星と解釈し、12人の弟子を12か月のシンボルと解釈すると、冬に再生する太陽神の象徴として理にかなう面がある。13人目の弟子は約3年ごとのうるう月を意味している解釈できる。また、十三湊や十三妹などという言葉が使われているのを見ると、東洋でも重要な数として注目されていたのではないだろうか。土佐も十三の当て字だしたらうるう月の意味が込められているかも知れない。

新約聖書の使徒行伝によるとステファノの殉教の後、急いで代替りの使徒を選び出したと書いてあるように、どうしても12人でなければならないようである。旧約聖書でエジプトでのヨセフとモーゼの活躍が語られるようにユダヤ教とキリスト教はエジプトの太陽信仰の影響を受けていると考えられる。そのために神の子として復活したと重要な教義になったのであろう。

このように身近な習慣や品物や地名などの中に古代からの隠された意味が込められていることがあるので、私は日頃からこの太陽信仰の名残を気に掛けているのである。

8 日本のレイラインの意味

だんだんと仮説の断定が大胆になってきたので、違和感を持たれる方もいるであろうが、この章でも更に大胆な仮説を展開するのでご了承いただきたい。

まずは、広島県の厳島神社は太陽の観測を元にあの場所に置かれたのではないかという私の仮説を述べる。厳島神社は海の神・宗像三女神を祭るが、伝説として厳島に落ち着くまでに何カ所かの島を移転していったという伝説がある。この移動は勢力争い、風土、儀式などいろいろな理由が考えられるが、私は星か太陽を観測してふさわしい場所を探したと考えた。そして地図をみると伊勢神宮や平城京とほぼ同じ緯度の北緯34度だと気が付いた。更に西を見ると西安もこことほぼ同じ北緯34度線上であることを発見した。（図6）

つまり咸陽や長安などの古代中国王朝の都とほぼ同じ緯度なのである。日本の国造りにおいて中国王朝と同じ設備や儀式を取り入れる意欲が強く、まったく同じ天文儀式ができる都を開いたのであろうと考えられる。そのための観測道具が八尺の棒であり、この棒で正確な東西を観測し、その方位に2本の棒を並べて、綱を渡したものが鳥居の原型ではないかと私は考える。6・7世紀前後に日本の各地でこのような観測が行われた名残が厳島神社の伝説なのだろうと考えた。そして中国王朝の原典通りの星祭りの儀式ができる場所は朝鮮半島では北すぎるので、朝鮮の勢力も辺境の日本に一目置いたのではないだろうか。

この北緯34度付近には、面白いことに次のような地名の共通音がある。

長崎県対馬の厳原（いづはら）－広島県厳島（いつくしま）神社－兵庫県淡路島妙見山（伊勢の森）－大阪府和泉市－三重県伊勢・津－静岡県伊豆半島の6つの地名の呼応である。



図6 北緯34度のメッセージの地図

古代人は、対馬から伊豆まで、「いづ」の音を並べて何を伝えようとしているのだろうか。まったくの偶然なのだろうか。徐福伝説の徐福も本名は徐市（じょいつ）というそうで、なにか所縁がありそうだ。

そして宇和島の泉が森も「いつ」の音を尊重して取り入れた地名かも知れない。

宇和島地方の幻の天神の探求のはずが、どうやら日本の古代の国作りの忘れられたメッセージを掘り起こしたようである。

また、古事記にイザナギ尊とイザナミ尊が淤能碁呂島（おのごろじま）に最初に降り立たと出て来るが、このことは、日本の基準点をおのごろ島で定めたということを伝えているという説がある。南北に長い淡路島沿岸で船を使って機材を運びつつ、南中高度や北極星の高さを測って回ったのではないかと。そして、長安に近い緯度を探して、飛鳥の宮や平城京の位置を決めたのではないかと私は推測している。淡路島の妙見山がランドマークとして設定されたのであろう。

更に、オノゴロとは自ずから凝り固まるという言葉が語源であるというのが一般的な説だが、私は違うのではないかと考えている。オノコロと連体形の言葉ならばじっくりくるのだが、おのずから凝ろうという意志のこもった言葉では意味が食い違う。オノゴロは、オンノコロ、すなわち「陰の頃」からきているのではないだろうか。八尺の棒の影を測る日時の冬至や夏至の正午を意味する言葉として残されているのではないかと考えているのである。

太陽や北極星の観測は天皇制の権威を高めるのに大切な仕事だったのだろう。この測量技術や祭祀を伝えたのは徐福か遣隋使か百済人か、他の集団か、独自の技術だったのか、ぜひとも知りたい謎である。この謎の答は、宇和島の天神の高度な測量技術の出所の手掛かりになるはずである。

9 結論

この論文の結論は、1300年以上前の宇和島地方には正確な子午線を測量して天体観測儀式を行っていた集団がおり、天神という地名に名残をとどめているということである。

更にもっと古代から毛山をランドマークとしてうる月の調節を決めていた可能性があるということである。

長安から奈良までの東西ラインの存在や、キリストの暗示などは検証が弱い主張であるが、日常の雑事に紛れて、普段は考えが及ばない宇宙と人類との関係について考えることもたまには必要であろうと考える。

この宇和島の子午線の研究結果が真実であればよいと願っているが、不本意な反証が示されたとしても冷静に受けとめる科学的な視点も保たなければならない。

またこのような研究を深めていくことは、私の専

門の情報教育についての大事な2つの心掛けを実践することになる。

一つ目は先入観を捨て去り、忘れられたメッセージを受けとめる発想法を鍛えることである。すると様々な現象の関連性が見えてくる。その知的冒険が更に頭脳訓練になるのである。

二つ目は、情報爆発の現代で皮相な流行に振り回されないために、独自の研究テーマを追跡しつつ自分の視点を保つように心掛けることである。

以上の2点が高度情報化社会において心掛けるべき点であり、私が情報教育で教え子たちに学んでほしい知恵である。

参 考 資 料

参 考 文 献

- 1) 愛媛県百科大辞典 昭和60年6月愛媛新聞社刊
- 2) 愛媛・新風土記 横山昭市著 平成12年3月(財)愛媛県文化振興財団刊
- 3) 人麻呂の暗号 藤村由加著 平成元年1月新潮社刊
- 4) 新約聖書 (財)日本国際ギデオン協会刊
- 5) 創世の守護神 グラハム・ハンコック他著 平成11年11月 小学館文庫刊

参考 Web ページ

- 1) グーグルマップ <http://maps.google.co.jp/>
- 2) CiNii 論文 - 30 宇和島城下町にみる藤堂高虎の設計技法
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006885897>
- 3) 周髀算経と周礼をめぐる Q&A (質問者は私)
<http://okwave.jp/qa/q6059504.html>
- 4) 愛媛県神社庁ブログアーカイブ
<http://ehime-jinjacyo.jp>
- 5) 桓武天皇の昊天祠祭の考証
<http://www.d3.dion.ne.jp/~stan/kasi/osk-ktn.htm>
- 6) 海上保安庁の日日出没時刻方位案内サイト
http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KOHO/automail/sun_form3.htm
- 7) 八十八カ所古地図
<http://www.gsi.go.jp/WNEW/koohou/472-2.htm>